

# リルケの「世界内部空間」概念について

濱 崎 一 敏

## Über den Begriff “Weltinnenraum” Rilkes

KAZUTOSHI HAMASAKI

- 〔Ⅰ〕 「世界内部空間」概念の成立
- 〔Ⅱ〕 「世界内部空間」
- 〔Ⅲ〕 「世界内部空間」概念の展開

### はじめに

「新詩集」「マルテの手記」で代表されるリルケ中期の詩作の核心には「見る」という行為がみられるが、「ドウィノの悲歌」「オルフォイスに捧げるソネット」で代表されるリルケ後期の創作の基盤には、詩「転向」を境として明確な形をとってゆく「世界内部空間」概念がある。「世界内部空間」概念の成立については、手記「体験」の中で詳細に報告されており、これよりほぼ二週間前に書かれた詩「スペイン三部曲」の中でも、すでにこの概念成立の萌芽をみることができる。本論では、「マルテ」以後のリルケ自身の内的危機に触れながら、これら三つの作品を追って、「世界内部空間」概念の成立を述べると共に、いわゆる「世界内部空間」詩(Weltinnenraum-Gedicht)をとりあげて、その意味内容を考察してゆく。最後に、「ドウィノの悲歌」殊に第八の悲歌を中心に、「世界内部空間」概念が「開られた世界」(das Offene)として独自の展開をみせるその有様を述べる。

ベーダ・アレマンは、その著「後期リルケにおける時間と形象」(1961年)の中で、リルケの「世界内部空間」概念を三つの次元に分けて説明している。アレマン以前の研究者達、例えばウェルナー・ギュンターが、「最も高度な直観(die höchste Intuition)」などと述べて、不明瞭にしか説明していなかったリルケの「世界内部空間」体験の手続について、アレマンは比較的明瞭に分析を加え、魔術的な、もしくは例外的な状況の中での直観や感情移入による「世界内部空間」体験、もしくはリルケ独自の世界認識という従来の解釈を否定しているが、この点でアレマンのリルケ解釈の意味は大きいと考えられる。アレマンに対しては否定的でありながらも、このようなアレマンの研究上の姿勢を受け継ぐ形で、後に、ケーテ・ハンブルガーが、本質直観(Wesensschau)というフッサール現象学の問題を導入しながら、「見るという

概念は、≫内部的直観≪、もしくは神秘的な意味での（in einem mystischen Sinn）直観の意味は決してもたずに、常に外部世界を認識するという行為（das Wahrnehmen）を意味しているのだ」（Käte Hamburger, *Die phänomenologische Struktur der Dichtung Rilkes in: Philosophie der Dichter*, Stuttgart Berlin Köln Mainz, 1966, S. 184）と、リルケの「見ること」を定義づけ、フッサール現象学の「志向性」（Intentionalität）、「先験性」（Transzendentalität）と、リルケ文学に表現されている思想性との類似関係を論証することによって、より深くより論理的なリルケ解釈を行ってゆく素地をここにみることができからである。詩人の「世界内部空間」概念の意味内容及びその展開については、ここでは主に「思ひ出」の要素を重視して、「より高度な時間性」（die höhere Zeitlichkeit）という時間概念をリルケ解釈に導入したアレマンの考え方に従って考察してゆくことにする。

### 〔I〕 「世界内部空間」概念の成立

「世界内部空間」概念の成立に関連しては様々な論述がみられる。1913年1月14日に書かれた「スペイン三部曲」とその概念の礎柱（Grundpfeiler）だとする者<sup>1)</sup>、それよりおよそ二週間後の2月1日に、同じくスペインのロンダで書かれた手記「体験」の中で初めてリルケは「世界内部空間」体験（Weltinnenraum—Erfahrung）について詳細に語っていると述べる者<sup>2)</sup>、そして「この概念（der Begriff）は1914年ないし1922年に成立したが、その理念（die Idee）はすでに早くから浮んでいた」と論じている者<sup>3)</sup>、などである。1914年は、いわゆる Weltinnenraum—Gedicht（世界内部空間詩）と、そして、リルケが中期から後期に至る詩作態度の転換を表現した詩転向（Wendung）の書かれた年であり、1922年は、「世界内部空間」概念が「開られた世界」（das Offene）として展開される第八の悲歌が完成すると共に、第十の悲歌まで、ドウィノの悲歌全てが完成した年に当る。

「世界内部空間」概念の成立を、以上のように詩人の作品だけに焦点を絞って探ろうとすれば、それぞれ研究者の立場に従い重点の置き方は異なることになるが、これ等の作品が成立するに当っては、これ等の作品全てに共通する直接的な動因がみられるのであって、リルケが1912年ドウィノに滞在したときのいわゆる“体験”がそれである。初めに述べたように、この詩人自身の“体験”については、手記「体験」の中で詳細に語られている。従って「世界内部空間」概念成立の直接的動因となったこの“体験”については後に「手記」を通して詳しく論じることになるが、この概念成立の間接的とも言うべき他の要因をまずここで述べることにする。

Werk des Gesichts getan

tue nun Herz—Werk<sup>4)</sup>

と、決断を下すように、詩転向（1914年）の中でリルケが歌うまでには、「マルテの手記」「新詩集」で代表される中期の創作態度「見ること」を脱皮して、後期へと発展してゆく苦しい過程が詩人の内部にあった。リルケは1909年～1910年の冬「マルテ」を書き上げ、以後大戦の始まる四年半の間、熱病にとりつかれたように、エジプト、イタリア、そしてスペインへと

旅行する<sup>5)</sup>。一方ではクロップシュトック、ヘルダーリン、シュティフター、クライスト、ビューヒナー、グンドルフ、ゲーテなどに深い関心を寄せるのである<sup>6)</sup>。リルケがこのような旅行に駆りたてられ、ドイツ文学史上大きな価値を認められているこれ等文学史家や作家達に関心を示さずにはおれなかった背景には、彼自身の精神的な危機があった。生と彼自身、そしてあらゆるものに対する信頼感の喪失がそれであり、生の無常、死の不安などの感情が、これまでになく彼を苦しめる<sup>7)</sup>。詩人自身に関するこの辺りの事情は、現代の大都会パリの街を放浪しながら自己の存在基盤を探し求める「マルテの手記」に充分表現され尽くされているとも言える。<sup>8)</sup>

リルケの手記「体験」(1913年)について、ウルリヒ・フュレボルンは、ベード・アレマンの著「後期リルケにおける時間と形象」(1961年)と並んでリルケ後期詩の本格的な研究と称せられる<sup>9)</sup>その著書「リルケの後期詩の構造の問題」(1960年)の中で、「リルケは、この手記において、自分自身の魂の体験を、明らかなことだが可能な限り客観性をもたせようとして三人称で書いている。多分彼の後期詩の体験の核心(Erlebniskern)を明示する意図からであろう」<sup>10)</sup>と述べている。すでに引用した詩「転向」の中の「心の仕事」(Herz-Werk)が「世界内部空間」体験によって初めて可能となった後期リルケの新しい創作態度であり、この創作態度から後期の二つの代表作「ドウィノの悲歌」及び「オルフォイスに捧げるソネット」が成立したいきさつを考え合わせると、イタリアのトリエステ近郊、アドリア海を臨み見るドウィノの館で詩人に生じた“体験”の意味の大きさが理解されると同時に、「世界内部空間」概念が、見る(das Schauen)転身(die Verwandlung)委託(der Vortrag)など、いわゆるリルケ的な様々な概念の中でも、最も重要な概念であることは容易に理解される。「世界内部空間」概念は、リルケ後期詩の核心であるといえる。

手記「体験」は一部と二部とに分れており、一部においてドウィノの館における体験が報告され、二部においては、他の同種の体験を思い出の中に探りながら、最後に、喜び(Freude)を語り、もの(Dinge)や「自然との交流から生じた個々の事柄を人々に告げること」<sup>11)</sup>が、彼の今後の詩的使命であることを予感的に述べるのである。

手記の中で「彼」は、海に続く斜面の上で、一本の樹のまたに凭れかかりながら、突然これまでに一度も経験したことのない感情に襲われる。「それはあたかも、樹の内部から、ほとんど気付かれないほどの顫動が彼の内部に伝わってくるかのようであった。」<sup>12)</sup>彼の内部と外部世界とが流動し合い調和してゆくこの一種の恍惚状態<sup>13)</sup>を、彼は「自然の向う側に出てしまった」<sup>14)</sup>と表現している。

二部において、「彼」は過去の同種の思い出について語る。「彼は、他の南国の庭園(カプリ)における一時を思い起した。その時、鳥の叫び声は、外部と彼の内部とで同時にひびきわたり、いわば彼は肉体の境界で決裂を味うこともなく、内部と外部とをまとめて断絶のない一つの空間を出現させた。その空間の中では、最も純粋で深い意識の唯一の場所だけがひそかに守られているのだった」<sup>15)</sup>

カプリでの思い出を語ったこの部分では、リルケは鳥の叫び声を媒介として、人間の内部と外部とを貫き通る普遍的とも言えるべき空間について述べている。このような空間体験は、「自然の向う側に出てしまった」という表現の通り、通常の意識の枠を取り払った状態の中で生じるのであるが、「ひそかに守られている」「最も純粹で深い意識の唯一の場所」が、「世界内部空間」体験を可能にする意識の場所であり、<sup>16)</sup> また、その意識は、「自然との交流から生じた個々の事柄を人々に告げる」役割をも果たことになる。ここに後期リルケ詩の源泉をみることができるのである。

すでに「手記」の二部で明らかなように、リルケの「世界内部空間」体験に付随している「思い出」の要素を殊に重要視して、後期リルケ詩の空間と時間との関連を論じているベード・アレマンは、「カプリにおいてはじめて、世界内部空間体験の古典的形成がなされたのだ」<sup>17)</sup>と述べ、この概念形成の萌芽はすでに久しい以前<sup>18)</sup>である。としている。思い出の領域にまで立ち入って、その成立の起源を探るとすれば、ここでアレマンの論も重視しなければならないが、本論では、リルケ自身のドウィノの館での“体験”から手記「体験」へと続く明確で具体的な事実をたどることが目的である。

手記「体験」におよそ二週間先立って歌われたスペイン三部曲 (Die Spanische Trilogie) では、その〔I〕で、「ものを作らし給え」(ein Ding zu machen)と主(Herr)に呼びかけた後、その〔II〕において、牧人(ein Hirt)の姿が描写される。

so ausgesetzt dem Übermaß von Einfluß,  
beteiligt so an diesem Raum voll Vorgang,  
daß er gelehnt an einem Baum der Landschaft  
sein Schicksal hätte, ohne mehr zu handeln.<sup>19)</sup>

「風景のもつ一本の樹に凭れかかった」彼、すなわち牧人の姿は、読む者に「体験」の中の「彼」を思い起させずにはいない。「外部の過剰な影響にさらされ」、「もはや行動をしない運命」をもつ牧人は詩人(der Dichter)の象徴である<sup>20)</sup>。さらに、

Da steht er nächstens auf und hat den Ruf  
des Vogels draußen schon in seinem Dasein  
und fühlt sich kühn, weil er die ganzen Sterne  
in sein Gesicht nimmt, schwer—.<sup>21)</sup>

戸外の鳥の声が彼の存在の内部に入り込み、外界と内界との境界が失なわれたこの新しい次元の空間体験もまた、すでに述べた手記「体験」の中で報告されたものと一致している。

「世界内部空間」概念の成立については、思い出の領域は別にして<sup>22)</sup>、リルケのドウィノの館での事実上の体験が起点となり、作品の上からは、それが「スペイン三部曲」において或る程度具体的に表現され、続いて手記「体験」の中で詳細に報告される、という過程をみることが可能である。

## (II) 「世界内部空間」

「ドウィノの悲歌」が完成した1922年2月、従って「開られた世界」(das Offene)が歌われる第八の悲歌とほぼ同じ月日に書かれた第七の悲歌の中に、次のようなよく知られた詩句がある。

Niergends, Geliebte, wird Welt sein, als innen Unser  
Leben geht hin mit Verwandlung. Und immer geringer  
schwindet das Außen.<sup>23)</sup>

“Und immer geringer / schwindet das Außen.” については様々な解釈があるが<sup>24)</sup>、「ドウィノの悲歌」全篇の帰結であり最頂点だと見なされる第九の悲歌の最終部分、「眼に見えないものとなってわれわれの内部で甦えること」、つまり転身(Verwandlung)こそ、おまえの望むところではないか、と大地(Erde)に呼びかける部分<sup>25)</sup>、と考え合わせると、この詩句は悲歌全体の流れとしても、転身(Verwandlung)という言葉に直接関連している意味内容に解釈せざるを得ない。内部と外部との境界が失なわれ、転身によって外部世界が内面化されて、より少なくなり消え去るというのであり、引用した詩句全体としては、この転身(Verwandlung)の行われる内部世界の力もしくは偉大さが賛えられているものと解釈できる。第七の悲歌では、このように外部世界が内面化されるといういわば外から内への図式が考えられる。また逆に、リルケの中期から後期に至る詩作態度の転換を示した詩転向(Wendung)の中の「心の仕事」(Herz-Werk)という表現が示すように、この「転身」を行う内部の外部世界に対する態動的な働らきかけ、いわば内から外への図式も見逃がされてはならない。

同様に、Es winkt zu Föhlung fast aus allen Dingen で始まり、一般に Weltinnenraum-Gedicht (世界内部空間詩) (1914年)と呼ばれている作品の中に次のような部分がある。

Durch alle Wesen reicht der eine Raum;  
Weltinnenraum. Die Vögel fliegen still  
durch uns hindurch. O, der ich wachsen will,  
ich seh hinaus, und in mir wächst der Baum.<sup>26)</sup>

アレマンはこれ等の詩句について、「この場合ただ単に、外部世界の内面化ということだけが問題であるわけではない、その逆の行為も、つまり内面を外部の事物に投げかけるという行為もまた、世界内部空間概念の全体を構成する部分なのである。」<sup>27)</sup>と述べ、続いて、「世界内部空間」概念を三つの次元に分けて説明している。例えば、「世界内部空間」(Weltinnenraum, Berlin, 1952)の著者ウェルナー・ギュンターが、「最も高度な直観の中で体験されるザインのあらゆる場所を、リルケは世界内部空間と呼んでいる。」<sup>28)</sup>と述べるなど、リルケの研究者達が、これまで不明瞭にしか説明していなかった詩人の「世界内部空間」体験の手続について、アレマンは比較的詳細に説明を加えているのである。

アレマンによれば、上に引用した「世界内部空間詩」の詩句からも明らかなように、まず第一にリルケは、空間を静的なものとしてとらえず、鳥や木など全ての事物を動的なものとして

とらえている<sup>29)</sup>。第二に詩人は、この動的な空間に対置される客観的な位置にあるのではなく、詩人自身もこの動的な空間に組み込まれた存在である。但しリルケは、内部と外部との境界を、魔術的な直観や感情移入で越えるわけではなくて、それにははっきりと規定される形式が見られる。つまり、「彼は自分自身を動かして (*sich selber bewegen*)、外部世界の事物の動きに合わせ (*teilnehmen*)、それ等を内面化する。それから逆に、内部空間を投げ出すことによって事物が初めて形態へと高められる。」<sup>30)</sup> というのである。アレマンが、ギュンターの「最も高度な直観」(*die höchste Intuition*)というあいまいな表現を克服する形で、リルケの創作態度をより深く具体的に解明しようとした意味は大きい。しかしそれがさらにより明確に論理化されるには、フッサールの現象学との関連でリルケを論じたケーテ・ハンブルガーの、「リルケ文学の現象学的構造」(*Käte Hamburger; Die phänomenologische Struktur der Dichtung Rilkes*, 1966)を俟たなければならない。本論ではひとまずアレマンの論に従って考えてゆきたい。アレマンはさらに、第三に、リルケの世界内部空間は、過去の思い出によって初めて現実のものとなる空間であると述べて<sup>31)</sup>「世界内部空間詩」(*Weltinnenraum-Gedicht*)の第一節にある「思い出せ」(*Gedenk!*)という命令形の言葉を殊の外重要視している。「このような思い出がなければ、世界内部空間は生じない。われわれはまさに、世界内部空間は、結局、回想もしくは思い出の次元の中に在ることができる」<sup>32)</sup>と述べて、アレマンは心理学でいう *Déjà-Vu* 現象をこの「世界内部空間」体験に関連づけている。「世界内部空間」体験においては、内界と外界すなわち、主体と客体との境界が失なわれるのと同様に、思い出によって、われわれが日常体験しているいわゆる“時間”(アレマンは *Chronometezeit* と表現している<sup>33)</sup>)が示す過去と現実との境界も失なわれる。そして、この日常的な“時間”の背後に、過去から未来まで全てを包括するより大きな時間(*die größere Zeit des ganzen Umkreises*<sup>34)</sup>)が意識されるというのである。

「世界内部空間詩」の第二節

Wer rechnet unseren Ertrag? Wer trennt  
uns von den alten, den vergangenen Jahren?

過去は単なる過去ではない、われわれは、「より大きな時間」の流れの中で過去と結びついて  
いる。思い出による「より大きな時間」<sup>35)</sup>の体験、これがアレマンの言う「世界内部空間」体  
験の第三のしかももっとも重要な要素であり、アレマンは、「世界内部空間」(*Weltinnenraum*)  
は、より正確には、「世界内部時間空間」(*Weltinnenzeitraum*)と呼ぶべきところだとも述べて  
いる。<sup>36)</sup>

### 〔III〕 「世界内部空間」概念の展開

リルケ後期詩の核心である「世界内部空間」概念は、第八の悲歌において、「開られた世界」(*das offene*)として独自の展開をみせている<sup>37)</sup>。

Mit allen Augen sieht die Kreatur

das Offene. Nur unsere Augen sind  
wie umgekehrt<sup>38)</sup>

生きものは全ての眼で「開られた世界」を見ており、われわれの眼だけが逆の方向を見ている。というこの第八の悲歌冒頭の句は、生きものと人間との存在様式を対比しながら、「開られた世界」について語り、終始それへの参入を希求してゆくこの悲歌のモチーフの性格を如実に示している。

Frei von Tod.

Ihn sehen wir allein; das freie Tier  
hat seinen Untergang stets hinter sich  
und vor sich Gott, und wenn es geht, so geht es in Ewigkeit<sup>39)</sup>

死にとらえられない自由な存在として、動物は、自己の前に神を見、永遠の中へ歩いてゆく。

Dieses heißt Schicksal: gegenübersein  
und nichts als das und immer gegenüber<sup>40)</sup>

動物と異って意識の枠をもつわれわれ人間は常に、解釈され定義づけられ、閉ざされた世界の中で全てに向い合って生きている。これがわれわれの運命だ、というのである。第八の悲歌では、このように「神」「永遠」という言葉以外にも、「開られた世界」を象徴する表現として、「純粋な空間」(der reine Raum)、「否定のないどこでもないところ」(Nirgends ohne nichts)、「第一の故郷」(die erste Heimat)などが使われている。いずれも、われわれ人間がもっているような意識 (Bewußtheit unserer art) をもたない動物達だけが見ることのできる世界であり、そこには主体と客体との対立葛藤もなければ、生の終焉を意味する死という概念も存在しない。空間と時間とを越えた世界、これが動物の見る「開られた世界」(das Offene) である。一方われわれ人間は、「運命」(Schicksal) の中で、全てが隔りである (Hier ist alles Abstand) 第二の故郷 (die zweite) を住みかとしている。アレマンは、「運命」は「時間内存在」(»in-der-Zeit-Sein«) と同義であるとし<sup>41)</sup>、また「隔り」は「単に空間的に向い合っている (Gegenübersein) ことだけを意味するのではなくて、もっと根本的に、時間的な隔り、つまり根源 (Ursprung) からの疎隔を意味しているのだ」<sup>42)</sup> と述べ、シュタイナーは、人は「運命」を外界との出会いによって体験するが、外界との出会いは決して持続的なものではないから、従って「運命」は、われわれの存在の無常性を表現している言葉だと解釈している<sup>43)</sup>。人間は、日々生を営み、そして終いには死に至る存在者のために作られた、いわゆる“時間”の中で、あらゆる対立を内部に孕みながら生きる運命をもつ。アレマンの言う「根源」は、作品の上からは、「第一の故郷」もしくは「開られた世界」である。

リルケは、この第八の悲歌の中で、「生きもの」(die Kreatur) をさらに具体的に三段階に分けて、「開られた世界」に対するそれぞれ異った関連の仕方を歌っている。リルケによると、自然の大地をそのまま母胎として生まれ成長してゆく小さな生きもの (die kleine

Kreatur), すなわち蚊 (die Mücke) は至福である。その卵を大地に抱かれながらも、反面親鳥の羽根で庇護され温められてはじめて生まれ出る鳥は 半端な安定 (die halbe Sicherheit) しかもたない存在であり、そして第三に、大地からは完全に離れた母胎から生まれる動物は、われわれ人間と同様に「思い出」という大きな憂愁の重みと不安 (Gewicht und Sorge einer großen Schwermut) にまといつかれて、「第一の故郷」からは最も離れた位置にある。このように高等動物を「第一の故郷」から遠ざけているものは「思い出」だという考え方は、他方では、「第一の故郷」に参入するには「思い出」を手段とする以外にはないという「思い出」の二面性を示唆した表現だと解釈される<sup>44)</sup>。

「思い出」による「より大きな時間」の体験が、「世界内部空間」体験の重要な要素だというアレマンの見解をすでにわれわれはみてきたが、同様にシュタイナーもまた、「より深い意味の時間 (die Zeit tieferen Sinns) は、内部で高められた時間、すなわち思い出された時間であり、それが開られた世界を出現させる。... リルケの考えに合致する愛の関連 (Liebesbezug) があるところでは常に、世界は、このような包括的な意味での思い出の中に止揚されている」<sup>45)</sup>と述べて、生命の根源である円現で至福な自然という母胎を思い出すること、つまり思い出による「より深い意味での時間」体験が、「開られた世界」の体験であるという解釈をしているのである。

### Anmerkungen

(1) Kim, S. 233

(2) Allemann, S. 20

(3) Fingehut, S. 67

(4) SW. II, S. 83

(5) Vgl. Mason, S. 78

(6) Vgl. a. a. O. S. 80

(7) Vgl. a. a. O. S. 81

(8) Kim は「見ること」から詩転向に至るこの辺りの事情を総括的且つ明確に次のように要約している。S. 236: Die Krise der Anschauung, die ihn zur "Wendung" veranlaßte und die aber nicht erst 1914, sondern schon bald nach dem Malte-Abschluß akut geworden ist, ist eine Krise der Innerlichkeit.

(9) Z. B. 神品, S. 117

(10) Fülleborn, S. 51—52

(11) SW. VI, S. 1042

(12) a. a. O. S. 1037

(13) Fingerhut はこの「体験」を次のように述べている。S. 81: Erfahrungen einer in der Extase empfundenen Kommunikation zwischen dem Innern des eigenen Ichs und der Innenseite der Außenwelt.

(14) SW. VI, S. 1038

(15) a. a. O. S. 1040



- (16) Vgl. Kim, S. 234: Weltinnenraum-Erfahrung sind Erfahrungen des "reinsten, tiefsten Bewußtseins"...
- (17) Allemann, S. 22
- (18) Rainer Maria Rilke Briefe によると、リルケのカプリ滞在は、1906年12月4日から1907年3月20日までと、1908年2月29日から4月12日までの二回である。
- (19) SW. II S, 45
- (20) Vgl. Günther, S. 41: Der "Hirst" wird ihm zum hohen Symbol des "ausgesetzten", alldurchschauerten Dichters: der Hirst, der durch sein bloßen Dastehen herrlich ist und Schicksal hat, "ohne mehr zu handeln".
- (21) SW. II, S, 45
- (22) すでに見た通り、アレマンも「古典的形成」(die klassische Formlierung)と述べて、カプリでの思い出をこの概念成立の起点だと論じているわけではない。アレマンはむしろこの概念成立に関しては、手記「体験」を重視している。Vgl. Allemann, S. 20
- (23) SW. I, S. 711
- (24) 例えば、ブツデベルグは、地上的なものの無常を表現したものと解釈しているし (Buddeberg, S. 424, S. 438), グアルディンは、現代における事物の価値喪失を表現したものだと言っている (Guardini, S. 27) また、ボルノウは、「精神化するという過程によって、外界が眼に見えないものに、つまり、精神的なものに転身される過程」が問題となっているのだと説明している。(Bollnow, S. 135—136)
- (25) SW. I, S. 720
- (26) SW. II, S. 93
- (27) Allemann, S. 15
- (28) Günther, S. 39
- (29) Vgl. Allemann, S. 16 ちなみに引用詩句を翻訳すると次の通りである：あらゆる存在をつらぬいてひとつの空間が広がっている：/世界内部空間が、鳥たちが静かに飛んでゆく/われわれのなかを通りぬけて、オオ、私が木になろうとして、/外を見ると、すると私のなかに木が伸びる。
- (30) Vgl. Allemann, S. 17: Rilke erfährt den Weltinnenraum nicht anders, als indem er sich selber bewegt, an der Bewegung der äußeren Dinge teilnimmt und sie dadurch verinnerlicht, wie umgekehrt das Entwerfen des inneren Raumes die Dinge erst zur Gestalt emportreibt.
- (31) Vgl. a. a. O. S. 18
- (32) a. a. O. S. 22
- (33) a. a. O. S. 23, S. 29
- (34) a. a. O. S. 28
- (35) Allemann は「より高度な時間性」(die höhere Zeitlichkeit)とも述べている。a. a. O. S. 30
- (36) a. a. O. S. 24
- (37) 「世界内部空間」は「開られた世界」と同義に解釈される。Vgl. Bollnow, S. 168; Fingerhut; S. 99; Allemann, S. 88: Das 'offene' der achten Elegie ist jene spezielle Perspektive des Weltinnenraumes, in welcher die Tiere sich schon immer bewegen.
- (38) SW. I, S. 714
- (39) a. a. O. S. 714
- (40) a. a. O. S. 715
- (41) Allemann, S. 90
- (42) a. a. O. S. 91
- (43) Vgl. Steiner, S. 199

(44) Vgl. Allemann, S. 91

(45) Steiner, S. 189

### Literaturverzeichnis

#### I. Texte

Rainer Maria Rilke. Sämtliche Werke in sechs Bänden, Hrsg. vom Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn, Frankfurt am Main 1955 ff. (cit. SW)

Rainer Maria Rilke, Briefe, Hrsg. vom Rilke-Archiv in Weimar. In Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Karl Altheim, Wiesbaden 1950

#### II. Zu Rilke

Allemann, Beda, Zeit und Figur beim späten Rilke, Pfullingen 1961

Buddeberg, Else, Rainer Maria Rilke, eine Biographie, Stuttgart 1955

Bollnow, Otto, Fr., Rilke, Stuttgart 1951

Fülleborn, Ulrich, Das Strukturproblem in der späten Lyrik Rilkes, Heiderberg 1973

Fingerhut, Karl-Heinz, Das Kreatürliche im Werke Rainer Maria Rilkes, Untersuchungen zu Figur des Tieres, Bonn 1970

Günther, Werner, Weltinnenraum, Die Dichtung Rainer Maria Rilkes, Berlin 1952

Guardini, Romano, Rainer Maria Rilkes Deutung des Daseins, Eine Interpretation der Duineser Elegien, München 1953

Kim, Byong-Ock, Rilkes Militärschulerlebnis und das Problem des verlorenen Sohnes, Bonn 1973

Mason, Eudo C., Rainer Maria Rilke, Sein Leben und sein Werk, Göttingen 1964

Steiner, Jakob, Rilkes Duineser Elegien, Bern, und München 1962, zweite durchgesehene Auflage 1969

神品芳夫：リルケ研究，小沢書店 1972

手塚富雄訳：ドゥイノの悲歌，岩波書店 1957

(昭和49年9月6日受理)